



## 幼児ばなしの裏と表

上 澤 謙 二

### ◆ お空に何が見えたか

こういう幼児ばなしがあつたとする。

『太郎さんと花子さんは、原っぱへあそびにいきました。よいお天気です。二人はお空を見ていると、蝶々が飛んできました。「ああ、蝶々、かわいいな」といいながら見ていると、ひらひらと飛んでいつてしまいました。そうすると、こんどは、鳥が飛んできました。「ああ、鳥、早いね」といいながら見ていると、ばたばたと飛んでいつてしまいました。そうすると、こんどは、凧があがつてきました。「ああ、凧だ。なにか、絵がかいてあるね」そう、金太郎のようだ」といいながら見ていると、ぶらんぶらんと、だんだんおりていつてしまいました。そうすると、こんどは、軽気球があがつてきました。「ああ、大きいな、あれには人が乗っているよ」といいながら見ていると、そろそろと、おりてしまいました。そうすると、こんどは、アドバルーンがあがつてきました。赤い字がたくさんついています。「あれ、なんていう字だろう」と、二人はよう

く見ました。「太郎さん、わかる？」「わからない。花子さん、わかる？」「わからない」といつていると、ゆらりゆらりと、おりていつてしまいました。そうすると、ごうごうという音がきこえてきました。「ああ、飛行機だ」。太郎さんと花子さんがむこうのお空を見ると、銀色のびかびかした飛行機が飛んできました。「ああ、きれいだね」といいながら見ていると、どんどんいつてしまいました。そうすると、太郎さんが「あれ、あれ」と、大きな声を出しました。パラシュートがおりてきたのです。人がぶらさがっているのが、よく見えます。花子さんも「あれ、あれ」といつていると、どんどんおりていつてしまいました。そうすると、むくむく、むくむく、雲がお空へ出てきました。「あんなに出てきては、何も見えないよ」「じやあ、おうちへかえりましょう」それで二人は、おうちへかえつてきました』

これは簡単な平凡なおはなしである。列に奇もない変もない。はらはらさせるような所謂「やま」もない。感心させるような教訓もない。おもしろおかしい笑いもない。まことにあつけないおはなし

である。

けれども、それは一応の感じである。形式にとどまる観方である。仔細に観察し、入念に検討すれば、このわずかな敘述の中に、実に多くの事象が織込まれ、深い意味が含蓄されていることに気がつくだろう。

### ◆自然へ目を開かせる

まず、そこには、空と人との親縁関係が蔵されている。

このお話をよく聴いた子供は、空というものに対して、一種の興味を催させられるだろう。ただ「高いところ」くらいにしか思っていないかたところ、いろいろなものがあらわれる。しかもそれはすぎなものばかりである。これでは、親しまざらんとしても親しまざるを得ないだろう。

空に親しみを感ずることは、延いて、自然に親しむことになる。

空は自然の大舞台で、いつも頭上にかかっているからである。だから、それに親しみを感ずることは、自然に対する目を開く門ともなるのである。敘述にあらわれたところは、わずかに「空を見る、度々見る」というに過ぎないが、その裏には「自然に対して目を開かせる」というほどの、重大な意味が潜んでいるのである。

### ◆聴いた子と聴かない子

そこにあらわれるものは、ほんの七つくらいだが、種類はなかなか広い範囲に亘っている。生物あり、玩具あり、機械あり、商業会の道具あり、現代文明の尖端をいく利器ありというわけである。だから、このお話を接する幼児は、自然にそういう広い接触の中に置かれる。そればかりでなく、興味をもつて、それらを見守るよう

なる。かくて、その眼界は次第に広まつてくるのである。

そこにあらわれるものは、度々見たことが知らないのではない。否、度々見たもの、あるすぎなものだということには前に述べたが、こういうように、現実界から特に引き出されて、心の目の前にびつたり寄せつけられると、従来感じた以上に感ずる。新たにそのものに注意が向けられ、興味が注がれるようになる。だから、そのものを見直すような態度も出てくるだろう。そのものについて、改めて考えるような気持も出てくるだろう。勿論大人のような意味で見直すとか、考え合わせるとかいうのではなく、それは自分でも気がつかないほどのぼんやりしたものであるかも知れない。けれどもそのおはなしに聴き入つたために、そこにあらわれるものに対しておはなしを聴いた前とは、ちがつた気持乃至態度が出てくるだろう。その気持態度のうちに「見直す」「考え合わせる」はたらきが、おのずから含まれているのである。

おお、飛行機が飛んできた。

居合わせた子供たちは、みんな手を挙げて叫ぶ。そうするところは、どの子供も同じである。けれども、それに対する関心、興味注意の程度乃至性質は、あのお話を聴いた子供と、聴かない子供とをくらべると、ちがう筈である。前者は後者よりも、多少とも、強く深く、こまかく、たしかであるだろう。

だから、この際「眼界がひろまる」というのは、単に知的にひろまるばかりではない、情的にも、又意的にもひろがる。たとえば飛行機のマークを知つたとすれば、それは知的拡大であり、飛行機をもつとすきになつたとすれば、それは情的拡大であり、飛行機をもつとわかろうと努めるようになったとすれば、それは意的拡大だといえよう。

おはなしの中にあらわれたところは「七つのもの」であるが、その裏には「精神生活全体を拡大させる」ほどの、重大な意味が蔵されているのである。

### ◆文化史的な七つのもの

「七つのもの」は、かわるがわる出ては消えていく。それだけである。けれども、そのあらわれかたは一定の順序を踏んでいる。即ち社会的又は文化史的順序である。人間の文化が進むにしたがって社会にあらわれてきた順序である。

蝶や鳥は人間のいない前からいたろう。それがさきに出てくる。それから、風、軽気球、アドバールン、飛行機、パラシュートと次第に出てくるのは、大体それぞれ發明されて、社会にあらわれてくる順序である。

幼児は何げなくこれに触れる。が、それは「文化史的發達の経過の中に自分をおくこと」であつて、何げなくとも、何等かその影響を受けざるを得ない。それは勿論「これこれ、しかじか」と、はつきりいえるほどのものではない。そんなに隱微的微妙なものである。しかしそれだからむしろしつくりと心の中にはいりこむのである。教わつておぼえたものは忘れることがあるが、我知れず自然に了得したものは忘れない。忘れたように見えても、何かの機会に、ひよつこり出てくる。これが自然的了得の特色であつて、何げないからかえつて深く影響させるのである。

殊におはなしのありがたいことは、そのものや順序が抽象的に並べられて、機械的に記憶されるのでなく、具体的にあらわされて、經驗的に印象されるといふ点にある。おはなしを聴くと、よく「わが身がその場に在るような氣持になる」といふが、それほど具体的な

に經驗されるのである。前に「文化史的發達の経過の中に自分を置く」といつたのも、このような意味が含まれているのである。

例として、ばつきりした場合を示してみよう。

友ちゃんはこのおはなしを聴いて「ちよう、とり、たこ、けいききゆう、アドバールン、ひこうき、パラシュート」と、何げなくおぼえたとする。それで時々口癖のようにいうこともあろう。しかしそれは大きくなるほど少くなつて、遂には特別にいわれることはなくなるだろうが、胸の奥には鑄りつけられていつて消えないのである。

やがて友ちゃんが大きくなつて、ほんとうの文化史を學んだとする。その時、その發達順序に非常な興味をもつか、その事件に特別な注意を払うか、その意味に強い関心を示したとする。なぜ人並以上にそうだか、自分にもわからないが、それには、あの時のあのおはなしのおかげがたしかにはたらいっていることを、誰が否定できようか。

### ◆遠大嚴密と單純簡明

こういう言葉がある。

「用意なしに客を迎えてはならぬ。しかも客を迎えて、その用意を強いてはならぬ。用意は細心でなければならぬ。しかも細心は当方の心がけであつて、それを客に示すべきものではない。その心入れがどこにあるのか氣ずかれないまでに細心でなければならぬ。(中略)その上手な趣向に誘われて、客は時の移るのも、もてなされても忘れることも忘れてくれる。客の幸福これに如くはない、主人の喜びも亦これに過ぐるはない。」

これは、倉橋惣三先生の著書「幼稚園保育法真諦」中の言葉であ

るが、まことに幼児保育の真諦を道破されたものと思う。ここに「客」とは園児を、「主人」とは先生を、「もてなし」とは保育の実際を指したものであらう。

幼児保育者は遠大な教育目的と、厳密な教育計画を樹てねばならぬ。しかし保育の實際に於ける幼児との接触面では「遠大」や「厳密」は全く影をひそめて、単純、簡明にならねばならぬ。しかし「影をひそめた」といつても、関係が絶えたのではない。否、かの遠大と厳密は、この単純と簡明に直接つながつて、絶えずいつしよに併っているのである。だから、幼児はこの単純簡明に沿つていくうちに、我知らずかの遠大厳密にはいりこむというのが、幼児保育の上業といふべきであらう。

大海原を見る。表は青だたみを敷いたように、平らでしずかである。けれども、その底には、強いうねりや大きな潮流が行き会い行きがちがつている。底にかの交錯があるので、表にこの平靜があるのである。

幼児保育にも、正にこの趣がある。海の表は即ち幼児との接触面に、又海の底は即ち先生が考案し、工夫し、努力する計画面にたぐすべきである。

### ◇同じお話が違つてくる

そこで思う。

幼児ばなしも、その根本的な行き方は、幼児保育のそれと同じである——と。

そこで更に思う。

幼児ばなしの創作も、この根本的な行き方に即した態度でなければならぬ——と。

創作の目的、意図、過程は、複雑、高邁、熱烈であるべきである。汗も流そう、涙もこぼそう。けれどもそれがあらわれたところは、単純簡明、あつけないようなものであるべきである。

これを作品についていえば、その一字一行に、複雑、高邁、熱烈が隠れているべきである。これを又作者についていえば、一字一行も苟くせず、考慮と、検討と、精練の限りを尽くす底の精進努力をなすべきである。かくて初めて単純簡明な一字一行に、遠大深遠な意精義神が裏づけられるのである。

そこで猶も思う。

幼児ばなしの口演も、この根本的な行き方に即した態度でなければならぬ——と。

兼び冒頭のおはなしの例を引けば、おはなしする先生は、まずその裏にひそむ精神意義について、思いきり凝らすべきである。そうすると、それが自然に対して目を開かせ、精神生活全体を拡大させ社会的文化的方面にまで伸びさせる大使命をもつてることがわかる。そのことをしみじみと思ひめぐらすべきである。

次で、その大使命が、どういう形で、どういうことばで、あらわされているか、それが最も強く出ている筋道と場面はどこか——具さに検討すべきである。それがひしひしと思ひ当るところまで突きとめるべきである。

そうすると、単におはなしとしての内容や構成ばかり観ていた時とは、同じおはなしでありながら、ちがつた姿をもつて映じてくるだろう。より広いより深い根本的な内面的な立場から眺めるようになったからである。

けれども、いよいよおはなしすると、この複雑深遠な使命は迹方もなくなつて、ただ「七つのもの」が順々に空の表へあらわ

れるだけである。話すことばも、話す先生の態度も、至つて単純明である。しかし使命は、そのことばと態度の裏にびつたりくついている。そうしていつしよに幼児の心の中へそうつとはいりこんで、気がつかない間に、じうつとしみこんでしまふのである。



「内容を圧縮せよ、結構を単純化せよ、登場人物を制限せよ、言葉を簡潔にせよ」というようなことは、幼児ばなしの創作について口演について、いつもいわれる慣用法ともいふべき条件である。素よりこの法は正しいが、それは作品又はおはなしのあらわれた範囲内にとどまつて、ここで述べたような根本的な世界には、直接関係しなかつた。

けれども、この方法は根本的態度と直接連絡させるべきである。この根本的な世界と照らし合わせて考慮し、解釈し、応用すると、あの慣用法は、今までよりは一段高い深い意味と、一層確かな明かな目標とを与えられるだろう。

かくて使命と、内容と、形式と、三位一体の、まず理想的に近い作品又はおはなしが、得られることになるだろう。

×

×

×

×

戸倉ハル・小林つや江 兩先生著

うたとあそび

B5判上製  
定価三二〇円  
千四八円

ラジオでもお馴染の楽しいうたに、著者独特のおもしろい振付けをし、これを教材として春夏秋冬の四季に分類配列したもの。挿絵と、直ぐ役立つ楽譜を収め、幼稚園、小学校低学年用の好適なる教材として著者も自身をもつて、おすゝめし、諸先生の好評の中に、第六版発行中。

わらべうたとあそび

A5判上製  
定価三二〇円  
千三二〇円

関東地方を中心とした诗情豊かな古いわらべうたをあつめそのあそび方を挿絵と楽譜付でやさしく説明したもの

ハンドカスタのゆうぎ

B5判上製  
定価三〇〇円  
千四八円

ハンドカスタをつかつてする楽しいおゆうぎのしかたを楽譜付でくわしく説明したもの。けだし、ハンドカスタを使つてするあそびの独創的なもの。

「ベビー・ハンドカスタ」も発売中

發行所

株式会社 不昧堂書店

東京都文京区大塚仲町二  
電話(94)二七〇三・〇九九二  
振替東京六八七三九